

野麦峠まつりに参加その5・

野麦峠を訪ねて

一働く人々の尊厳や権利を考える「学びの場」に出会う

JAM企画・渉外グループ・平松紗彩



5月23日から24日にかけて開催された日本労働ペンクラブ春の宿泊交流見学会に、JAMの立場で参加した。今回の見学会では、松本市歴史の里や野麦峠を訪れ、日本の近代化を支えた製糸工女たちの歴史や労働の実態について学ぶとともに、当時の労働者たちの暮らしや苦勞について考える貴重な機会となった。

初日に見学した松本市歴史の里では、工女宿「宝来屋」や製糸に関する展示を見学し、繭から生糸を取り出す工程について説明を受けた。熱湯に浸した繭から糸口を探し出し、一本の糸として繰り上げていく作業は、現在の感覚からすると想像以上に繊細で根気のいるものであったと考えられる。実際の工程を目の当たりにすると、当時の工女たちには高い集中力や技術が求められていたことがよく分かった。日本の製糸産業は近代化を支える重要な産業であったが、その発展の背景には多くの工女たちの熟練した技術と努力があったことを改めて実感した。

また、当時の労働環境についても学んだ。工女たちは長時間労働を強いられ、高温多湿の工場内で働いていた。病気にかかりやすい環境でありながら、現在のような社会保障制度や労働者保護制度などの仕組みは十分ではなく、病に倒れた際の支援もほとんどなかったという話は特に印象に残っている。さらに、多くの少女たちが幼い頃から家計を支えるために故郷を離れ、製糸工場で働いていた事実を知り、当時の労働環境の厳しさを改めて感じた。

現在の私たちは、労働基準法や社会保険制度などによって守られた環境で働いている。しかし、その制度は最初から存在していたわけではなく、多くの労働者が過酷な環境の中で働き、時には健康や命を犠牲にした歴史の上に築かれてきたものであることを改めて認識した。労働組合に関わる立場として、こうした歴史を学ぶことの重要性を強く感じた。

二日目には野麦峠まつりに参加し、旧野麦街道を歩いた。当日は曇り空で歩きやすい気候であったが、

山道には足場の悪い場所も多く、実際に歩いてみると決して楽な道のりではなかった。私たちは歩きやすい服装と靴で山行に臨んだが、当時の工女たちは重い荷物を背負いながらこの峠道を越えていたと思うと、その苦労は想像以上であったと思う。

野麦峠は単なる山道ではなく、工女たちが家族の生活を支えるために行き来した生活の道であった。幼い少女たちが故郷を離れ、不安を抱えながらこの峠を越えて工場へ向かったこと、そして一年の仕事を終えて賃金を手に帰郷したことを思うと、一步一步の重みが違って感じられた。

山頂や道中では「あゝ野麦峠」の石碑を見学したほか、地元の小中学生が工女の衣装を身につけ、当時の姿を再現しながら山行する様子を見ることができた。その姿からは、野麦峠の歴史や製糸工女たちの歩みが地域の中で大切に受け継がれていることが伝わってきた。歴史を学ぶだけでなく、実際に歩き、体験しながら次世代へ継承していく取り組みは非常に意義深いものだと感じた。

今回の見学会を通じて、日本の近代化を支えた製糸産業の発展の裏側には、多くの労働者たちの過酷な労働と犠牲があったことを改めて認識した。そして、現在では当然と考えられている労働時間規制や労働者保護制度が、こうした先人たちの経験や歴史の積み重ねによって築かれてきたものであることを実感した。

野麦峠に残る史跡や地域の取り組みは、単なる労働遺産ではなく、働く人々の尊厳や権利について考える貴重な学びの場であった。今回得た学びを今後に生かすとともに、この歴史を次の世代へ伝えていくことの重要性を強く感じた見学会であった。